

甲賀市は KOKA CITY 伊賀市は IGA CITY

忍者の里は、甲賀(コウガ)の里、伊賀(イガ)の里、だと・・・

「中学生が学ぶ事はいい事だ、

前回、夜間学校ニュースで、「甲賀はコウガでなくコウカです」と訂正をお知らせしたところ、「忍者の里は、甲賀(コウガ)だ。行った事があるから確かだ」という人がいました。

それで、さらに調べてみたところ、『甲賀市も伊賀市と同じく2004年の「平成の大合併」で誕生した町です。甲賀市の読み方は「こうか・し」で濁らないのですが、忍者の甲賀は誤読によって「こうが」という読み方が定着していたこともあって、合併の際に読み方に対する投票が行われています。』と、忍者の里のホームページに書いてありました。

投票の結果、甲賀市は、正しい読みの「コウカ」を採用、忍者の里は、誤読であるけど広く知られている「コウガ」ということになったということのようです。

ということは、伊賀市や加賀市は、誤読で、元々はイカ市やカカ市が正しいのかな? 「イカの忍者」や「カカ百万石」! 確かに、前田利家の奥さん「まつ」は、NHK大河ドラマでも有名で、「カカ百万石」でもおかしくはないような気はしますが。

読売新聞 読んだ?」と・・・

「昭和16年の新聞記事は、どうやって見つけるの」という質問もありました。

大阪市立中央図書館が、地下鉄西長堀駅の直ぐそばにあります。その3階に、大阪朝日新聞と大阪毎日新聞のマイクロフィルムが置いてあります。マイクロフィルムを拡大して見る事が出来る機械も、3台あります。

3階の相談カウンターで、新聞紙名と何年何月分を見たいかを、用紙に書いて提出すると、無料で見る事が出来ます。ただし、コピーを取る場合は、有料です。通常のコピーは一枚10円ですが、マイクロフィルムのコピーはもう少し高い(千円単位でお金を入れて、何枚も続けて取るので、一枚当たり幾らかを認識していかないのです)。

大阪版でなく、全国版で良ければ、同じ3階の左奥の棚に並んでいるので、係の人に言わなくても見る事が出来ます。

生活保護制度を活用し、有り余る時間を確保したら、古い新聞を眺めて、現代史の専門家になろう。釜ヶ崎関連の面白い記事を見つけたら、年号と日付だけでいいですから教えてください。よろしく。読売新聞についても、「ええことや」とお知らせ頂いたので、裏に紹介しておきます。

「どうして貧富の差が」「偏見あった」／岐阜の3年163人 野宿者への夜回りも体験

岐阜県中津川市立第2中学校の3年生163人が、大阪市西成区の釜ヶ崎（あいりん地区）を研修旅行（修学旅行）で訪れた。一部の生徒たちは、路上で寝泊まりする野宿者への夜回り活動にも同行した。地元の学校からの社会見学はまれにあるが、修学旅行での釜ヶ崎訪問はおそらく例がない。＜最底辺＞の現実に触れ、生徒たちは何を学び取ったのだろうか。（編集委員 原昌平）

「ホームレスの人がこんなに大勢いるなんて」「年配の男性ばかり」「同じ日本で、どうしてこれほど貧富の差があるんだろう」／ 地区内を歩いた生徒たちは、仕事につけない労働者の多さに驚き、支援団体の炊き出しに並ぶ約800人も行列に目を見張った。／ 全国最大の日雇い労働者の街・釜ヶ崎。昔に比べて建設などの求人が大幅に減り、やむなく野宿する人の密度は全国で最も高い。

一行が訪れたのは、2泊3日の大阪・神戸旅行の真ん中にあたる5月24日。朝からグループに分かれ、簡易宿泊所や福祉マンションが並ぶ地区内や関連施設を見て回った。炊き出しを手伝ったグループもあった。／ 午後はルポライターの北村年子さんが講演。「家がないだけでなく『安心できる居場所』がないのがホームレス」と語りかけた。／ 夕食後、生徒のうち男女30人は、民間施設「こどもの里」が行う夜回りに同行した。希望者はもっと多かったが、抽選で選んだ。

毛布やダンボールを敷いて寝ている人に声をかけ、体調や困りごとを聞く。ふだん配るおにぎりの代わりに、この夜は生徒たちが手作りした中津川のお菓子「からすみ」を手渡した。／ 「ありがとう」「岐阜かあ、長良川は行ったことあるよ」。緊張してこわごわ接する生徒たちに、そんな言葉が返ってきた。

「自分勝手な人というイメージがあったけど、しゃべったらフレンドリーだった」（三島賢尚君）「最初は怖いと思っ

てた。自分の中に偏見があったなあとわかった」（成瀬亜美さん）

それにしても、どうして釜ヶ崎なのか。同中学は3年前、研修旅行先を長崎から東京に変え、国会や最高裁などを見学したが、当時の教頭が「きちんとした意味のある学習を」と問題提起。昨年は新宿などのホームレス支援施設を訪れた。今年、東日本大震災があったため関西に変更した。／ 「支援する人間を育てようというのではない。物の見方を広げ、社会に目を向けてほしい。親の減収で塾に行けない生徒もいるなど貧困は身近な問題。雇用情勢も厳しく、世の中の『いす取りゲーム』は生徒たちに無関係ではない」と、準備の中心になった岩川太郎教諭（48）は説明する。

旅行から帰った生徒たちは、こんな感想を書いた。

「夜回りに参加する前は『こわい』『きもい』と思っていたけれど、『優しい』『おじいちゃんみたいな存在』といったきもちになりました」「ふつうに話せました。同じ人間なんだ！と思いました」「きたない・家がないというだけですごく差別をしていたんだなあと思いました」「これから無関心はやめようと思いました。そのためにも新聞を読もうと思いま

す」

◆写真＝夜回りでホームレスの人たちに声をかける生徒たち（釜ヶ崎で）／ ◆写真＝簡易宿泊所や福祉マンションが並ぶ釜ヶ崎を見学する生徒ら（注：写真は省略しました。読売新聞岐阜版には6月25日に掲載されたようです。）